

## 『播磨国風土記』を通じた人材育成事業

藤田 淳

### はじめに

『続日本紀』和銅六年五月甲子の条に記されたいわゆる風土記編纂の官命から一三〇〇年を経た平成二五年は、兵庫県、中でも播磨地域では播磨国風土記編纂一三〇〇年を記念した三ヶ年事業の幕開けの年であった。

この三年間に、各自治体や博物館、埋蔵文化財センター等では様々な関連事業を展開したが、その先鞭を切って当館では特別展「播磨国風土記―神・人・山・海―」を平成二五年四月二三日～六月二二日に開催した。

この展覧会では多くの当館ボランティアと共に学びながら様々な関連事業を作り上げてゆくという試みを行った。それは『播磨国風土記』という播磨地域の歴

史文化を紐解く上で極めて稀有で興味深い文献資料に、展覧会の制作に関わる中で触れ、関心を高めることにもつながるものだった。こうした試みは人材育成事業として実施したものではないが、結果としてはそういう側面も持ちえた。以下ではその経過と成果について報告を行いたい。

### 一 「播磨国風土記を読む会」の発足と活動

展覧会開催のおよそ二年前、当時館長であった石野博信名誉館長から、展覧会を作り上げるにあたり、当館の埋蔵文化財調査部（現（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）職員やボランティアも参画・協働すれば、より良い展覧会になるのではという提案をいただいた。

とはいえ、担当自身がそうであったように、ほとん

どのボランティアも『播磨国風土記』の存在くらいは知っていても、その内容を熟知しているわけではなかった。

そこで、ボランティアの有志を募り「播磨国風土記を読む会」（以下では読む会）という気軽な勉強会を立ち上げることとした。この会は、その名の示すとおり『播磨国風土記』を声に出して読むことから始めようというものである。そこに記載されていることを素人の立場で紹介し、何らかの問題提起などができればよいだろうという程度の軽い気持ちで始めたもので、明確な方向性があったわけではない。あわせて当館職員が考古学の立場から関連資料を紹介し、互いに理解を深めようというものであった。

読む会にはボランティア五六名が参加の名乗りを上げ、職員八名を含む六四名で平成二三年一〇月二六日からスタートした。参加ボランティアを九グループに分け、郡単位で担当を決めて、月一回のペースで開催、逸文を含め約一年をかけて全文を読み進めた。最初は果たしていつまで続くのだろうかという危惧もあったが、各回の参加人数は平均で四五人を数え盛会であった。職員が何か手出しをするということはほと

んど無かったが、回を追うごとに参加者の意欲が高まり、熱気を帯びてくるのが感じられた。自発的に現地へ赴き、関連する土地や山河、史蹟を訪ねるなど、熱心な事前調査が行われるようになった。前のグループの発表に触発され、もっと深く調べようという意識も働いたように感じられた。

また、参加ボランティアの中でも、もっと深く『播磨国風土記』を知ろうと自主的な勉強会も発足し、月一回のペースで開催された。

こうして平成二四年八月には一通りの発表が終わり、九〇一一月は『播磨国風土記のひみつ』の著者である是川長氏と神戸大学大学院特命准教授（当時）坂江渉氏を講師とした四回の講演会を聴講した。そして、一二月に行った逸文が残る明石郡の報告をもって読む会は終了した。総参加者は延べ六三五人に及ぶ。

その後は展覧会に向けて、発表内容の中から各郡のトピックスを選んで展示パネルの作成を行うこととし、フォーマットを決めた上で、グループごとにテーマの選択と原稿の作成を依頼した。さらに、担当郡を朗読して収録、紙芝居の製作、体験イベントの準備など様々な準備を協働で進めていった。

展示パネルは計一二枚分の手稿が提出された。内容のチェックと修正というやりとりを幾度か繰り返して完成させた。パネルは展覧会会期前半には西エントランスの通路に掲示した。後半は地下1階のネットワーク広場に移し、グループごとに三日交代で録音した朗読CDを流しながら、観覧者への解説を行った。観る者の関心の度合いによって反応は様々であったが、ボランティアにとっても来館者に自分たちの活動をPRする貴重な経験になった。また、それぞれの『播磨国風土記』への思いのこもった朗読も聞いていただくことができたと思う。

紙芝居は当館のボランティアグループである「ひょうご考古楽倶楽部」の紙芝居グループに製作を依頼した。若干のアドバイスを行った以外は、当グループに一任した。完成した「播磨国風土記おもしろ話 天日槍物語」は、会期中の土・日・祝日に計二三回上演され、一五四人の方々に楽しんでいただいた。このボランティアグループには、その後、平成二五年度に当館で製作した紙芝居『播磨国風土記ものがたり』の上演も引き受けていただき、館内のみならず「播磨国風土記紙芝居キャラバン」として、平成二五・二六年度に

は播磨地域の小学校を中心に職員と共に一一回の上演活動を行った。

体験イベントにもボランティアの協力は欠かせなかった。中でも五月一九日（途中降雨により中止し、二六日に再演）に実施した「再現！たたら製鉄」では、宍粟市立千草中学校二年生が、伝統的に実施している砂鉄を用いた「たたら製鉄」の様子を見学し、参考とした。材料となる砂鉄も千草中学校生と同様に千種川で磁石を利用して採取した。

事前準備では樋代わりの長尺コンテナと磁石を用いたカンナ流しによる砂鉄の選別、七輪を用いた製鉄炉の製作、燃料となる松炭の小割なども分担して行った。

一月一七日に行った試作では、鉄滓であるノロもうまく流れ出し、少量ながらケラができあがったが、本番では見事に失敗。ケラは全くとれず、製鉄の奥深さ思い知らさることになった。

さらには、兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会が進めていた播磨国風土記関連文化財の調査へも参加し、平成二五年二～三月に各グループの有志が市町の埋蔵文化財担当職員の協力を得て現地調査を行っ



播磨国風土記を読む会の実施状況



ボランティアによる現地調査

(苦勞の未探し出した佐用町中津河銘宝篋印塔)

た。その成果や展覧会で製作したパネルの一部は『広域に存在する文化財群の調査と活用―播磨国風土記関連文化財群に関する調査研究―』に掲載された。

## 二 その後の播磨国風土記を読む会

このような活動に触発された当館のボランティア有志の組織であるひょうこ考古楽倶楽部は、倶楽部創立一〇周年記念事業の一つとして平成二五年八月二四日に、グリーンヒルホテル明石で、「トークショー「播磨国風土記」」を開催した。来賓として清水ひろ子播磨町長にもご出席いただき、和やかな雰囲気の中で倶楽部員による発表や石野館長（現名誉館長）等によるゲスト講演会などが行われ、読む会の活動がボランティアの心の中に、着実に根付いていることを実感した。

平成二六年一二月一二日には、兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会主催の「今に残る播磨国風土記―考古楽者による現地調査報告会―」が開催された。神戸大学地域連携推進室地域連携研究員（当時）坂江涉氏をコメンテーターとして招き、先述の現地調査を総括することを目的としたものである。各グループからの代表一名が現地調査結果の発表を行い、坂江氏から講評をいただくとともに、最新の調査状況も報告いただいた。参加者は四一名であった。

## おわりに

今回報告した「播磨国風土記を読む会」を中心とした当館の活動は、冒頭でも記したように人材育成を目的としたものではない。しかしながら、この会を中心とする様々な活動を通して、参加者は『播磨国風土記』への理解を深めるとともに、その魅力に引き込まれていったように感じられた。少なくとも、参加したボランティアの心の中に『播磨国風土記』の種を植え、芽を育むことができたのではないかと思う。

本来、当館が開館五年前から養成を始めたボランティア、「考古学者」は、館の活動を支援するだけでなく、歴史的建築物などの文化遺産を対象としたヘリテージマネージャー制度に対して、考古学が扱う埋蔵文化財を対象として、地域の歴史文化遺産に関わるボランティアリーダーとしての人材育成も視野に入れていたものであった。残念ながら、開館後の館の活動を取り巻く様々な情勢から、そうした側面は薄れているのが現状である。

しかしながら、『播磨国風土記』という極めて地域

密着性の高い希少な歴史文化遺産が存在することを次代に伝えることも、播磨という名前を冠する町にある当館の重要な役割の一つである。当館の活動の中で今後もしも息長く取り組んでゆくテーマであり、人材育成にもつなげてゆきたいと考えている。